

報告

第 40 回日韓技術士会議

メインテーマ：グリーンテクノロジーと技術士の関わり

市 村 一 志

1. 会議の概要

第 40 回日韓技術士会議は、平成 22 年 10 月 16 日から 18 日まで、山口県下関市の海峡メッセ下関で開催された。会議の参加者は、技術士・同伴者・事務局を含めて、日本側が 261 名、韓国側が 162 名併せて 423 名、今までの最高の人数になった。今回の会議のメインテーマは、「グリーンテクノロジーと技術士の関わり」で、両国にとって非常に関心の高い分野を選択した。

社団法人日本技術士会は、第 40 回を記念して「日韓技術士会議 40 周年誌—交流の記録—」、「日韓技術士会議 40 年の思い出—参加者の余言録—」を刊行した。40 年間の全ての活動データーを整理し、参加された方の感想をまとめたもので、200 ページ、260 ページの分厚い冊子となった。私も 2 編出した。

主な行事は次のとおりである。

月日	行事内容	備考
10/16 (土)	日韓親善サッカー大会	北九州市運動場
	日韓女性技術士交流会	海峡メッセ下関
10/17 (日)	式典	海峡メッセ下関
	本会議	
	分科会	
	日韓親善晩餐会	市内見学
	レディースコース	
10/18 (月)	研修視察 A	下関、北九州
	研修視察 B	秋吉台、萩、他

式典では、社団法人日本技術士会の高橋会長から、日韓技術士会議が 40 周年の節目を迎えるにあたり、平成 22 年 7 月に日本政府から「永年に亘る日本と大韓民国との技術協力の促進」として評価され、



会場となった海峡メッセ下関、
中央のタワーは海峡ゆめタワー、30階に展望室がある

両国技術士会が「外務大臣表彰」受賞の栄誉を受けた、と報告があった。

本会議では、両国の委員長報告と基調講演が行われた。実行委員会の中山委員長は、日韓技術士会議の 40 年間を振り返り、特に 1992 年の第 22 回の会議以降、両国の地方都市で開催してから、今日の日韓技術士会議の拡大と充実に繋がり、地域の活性化を図る機会となり、技術士の PR を兼ね、社会貢献をしている、と報告した。基調講演は、日韓技術士実行委員の伊藤徹氏が「グリーンテクノロジーと技術士の関わり」と題して発表された。グリーンテクノロジーは、持続可能な社会を構築する上で重要な技術革新である。有限な地球資源の循環性構築に向けた技術の開発である。技術士に求められる能力は異なる分野の技術をコーディネートする技術力である、と講演した。

分科会は 5 分科会に分かれて行われた。

第 1 分科会：環境・資源・エネルギー・食糧

第 2 分科会：建設・安全・防災

第3分科会：技術倫理・技術資格・技術教育

第4分科会：電気・電子・情報・機械

第5分科会：英語発表(テーマは自由)



分科会の様子、座長は主催国の日本側が出し、
副座長を韓国側から出して進行した

この日は日曜日と言うこともあって、地元からの出席者が多かった。私は、興味を引かれた第4分科会の「電気自動車時代の道路交通とスマートグリッド」の発表を聞いた。これからの自動車の本命は電気自動車になるとして、それを想定した道路交通計画の検討、自然エネルギーと結びついた電力システム、すなわちスマートグリッドとの強調・連携の可能性を述べていた。既存の情報をよくまとめた内容で、更なる研究が期待される分野であり、具体的にどう一步を踏み出すかが問われている内容でもあった。

全体の分科会の内容は、メインテーマを意識しながら、具体的で着実な発表であった。発表者は、従来の委員の発表から、世代交代が起こり、若い方、様々な分野の方の発表となり、今後も技術士全体の力が出る方向を、探る必要があると感じた。

日韓親善晩餐会は、両国から350名余りの出席により華やかに開催された。中でも下関市の市長の挨拶は、下関を売り込む商売人として、河豚を含め郷土自慢をしながら盛んにPRをし、会場を沸かせた。開宴の後、日本技術士会から、4名の韓国技術士会会員の功労者表彰が行われ、日韓親善サッカー大会では初めて日本が優勝し表彰された。



韓国技術士の功労者表彰(左は高橋会長)
日本で開催の場合は韓国技術士を表彰する



親善晩餐会の恒例となった開催地の芸能
平家太鼓の披露

日韓技術士会議は、各国地方都市の協力無しには成立し得ない。第40回も地元下関市の技術士の皆さんの絶大な協力があって初めて成立した。中国支部には、松江市、米子市に続いて3番目の開催を頂いた。現在韓国は大変景気が好い。競争力の強化、ニーズの把握、グローバル化が成功し、韓国技術士の皆さんも大変元気が良いと感じた。

2. 40年の日韓技術士会議を振り返って

私は、1992年(平成4年)の第22回の新潟市で開催された日韓技術士会議が最初で、同委員会委員となった。以後毎年、韓国と日本の開催地に参加した。その中でも強烈な印象を持ったのは、韓国東海岸の北朝鮮との国境に近い束草(ソクチョ)市の開催であった。当時の様子を綴って見る。

韓国江原道束草市の開催は、第33回、2003年10月6日である。束草市は、韓国の東側の日本海に面し、北朝鮮国境から南へ約50kmに位置する。この数年前、北朝鮮軍人が小型潜水艦で韓国に上陸し、戦闘で1、2名逃がした事件があったが、正にこの付近のことである。

会場は、束草市街地から少し離れた丘の上にあり、家族でレクリエーションできるリゾート地になっていて、キャンプ場、温泉、ゴルフ場、ハイキングコース等がある。宿泊施設は、自炊できるように設計されていて、床がオンドルでガラとした何もない部屋に、蒲団を自分で敷いて寝るというシステムには少し戸惑いを感じた。開催地がソウルから直線距離で約160km、バスで約5時間と離れているため、日本各地から来る技術士はバラバラに集合し、本会議は無事終了した。

本会議翌日の見学会は、バス3台で北の国境に向け、天候も快晴でウキウキとした気持ちで出発した。間もなく見えてきた海岸には、砂浜、岬等全てに延々とバラ線が張ってあって、北からの上陸を防ぐためということである。国境に近い道路には、いたるところの両側にコンクリートの大きなブロックが積み上げられ、いざと言う時に崩して道路を塞ぐためと聞かされた。ピーンと張りつめた緊張の空間である。

雪岳山(ソラクサン)は、束草市から約30分であり、年間350万人の観光客が訪れる名所で、修学



雪岳山 観光客は年間350万人
内、外国観光客は60万人訪問する



統一展望台から見る北朝鮮側
遠くの山は北朝鮮、中央の小さな島が国境線

旅行生であふれかえっていて穏やかな光景であった。

国境の統一展望台は、検門所を通り抜け、人里離れて荒れた自然の中の小高い丘にあった。風景はあくまでも美しいが、私達見学者以外どこにも人の気配がしない、冷たい空間である。よく見下ろすと、北朝鮮に向けて一本の道が建設中である。完成して人々や物資が行き来する事になった時、ここの空気がどのように変わるのか、再確認してみたくなった。俳句を作ってみた。

「国境や 足元にそっと ちちろ虫」

現在の朝鮮半島は非常な緊張状態の中にある。ソウル開催の折、徴兵制度があることや時々避難訓練をしていることは聞いていたが、現実の状況になるとは想像すらしていなかった。正に平和ボケであったのだろう。韓国技術士と酒を酌み交わした時、北朝鮮の同胞に対して、同じ民族として複雑な感情を表していたのが印象に残っている。

3. 高杉晋作の地を訪ねて

下関市を訪問するのは初めてである。今、「龍馬伝」で話題になっている街、永年の歴史の積み重なった街に、福岡から列車で関門トンネルを通過してドキドキとした気持ちで到着した。JR下関駅前には、駅前広場の動線が2層構造になっていて、2階が人のための通路、広場で各建物に結びついて、人と車の

分離が出来ている。

下関市は、地政学的に海運の要所、本州と九州の近接点として、国内は元より海外の交流も盛んで、特に韓国との交流に深いものがある。下関に来て感ずることは、日本の交流の要所であることから、過去の歴史の中でキラリと光る一場面を演ずる瞬間が何度かあったと、地理を見て感ずるしだいである。人と物を運ぶ要所は、情報と経済を豊かにする要所でもあり、時代を先取りする感性が突然変異のごとく沸いてくると言うのも頷ける。



関門海峡、30分の間に貨物船、漁船、ボート、客船そして潜水艦も通過した。対岸は門司市

私は、司馬遼太郎の小説に影響されて、長州藩では、大村益次郎と高杉晋作が好きである。カッコ好すぎると言われる「伊勢谷友介」演じる高杉晋作、史実では小柄で長刀を差していたと言われ、本人もそれを気にしていたため直立して撮った写真が現存しない高杉晋作が、吉田松陰に才能を見出された。下関市は、長州藩のため延いては日本の将来のために、29歳の若さで世を去った高杉晋作の様な、明治維新の若者の生涯に思いを馳せる土地柄なのである。興味のままに、高杉晋作の墓に参拝してきた。場所は、下関市吉田町清水山に「東行庵」として整備されている。小さな川の上流の山に囲まれた森の中に記念館とともに墓があった。

高杉晋作が亡くなる時に、「吉田に…」と言ったそう。この「吉田」が、萩の吉田松陰の所か、奇兵隊があったここ下関の吉田か、今でははっきりしない



高杉晋作の墓・東行庵
何故このような山奥に作ったのか疑問が湧く

と言う。当時の周りの人達が、下関の吉田と解釈して、この吉田地区に埋葬したと言う。曹洞宗のお寺の関係者に聞いた言い伝えは、はっきりしなくて面白いと感じた。辞世の句は、「おもしろきこともなき世をおもしろく」である。「世を」としたのは、司馬遼太郎の文章からであるが、最近「世に」ではないか、と言う説が正しいらしい。「を」と「に」の違いは、高杉晋作の世界観に影響を与える。

この辞世の句は、現在、一番求められていることではないかと思ふ次第である。私個人としては「を」を選びたい。

市 村 一 志 (いちむら かずし)

技術士(建設部門)

有限会社 市村都市環境研究所

